

## 答辞

本日は、私たち卒業生のために、このような盛大な式典を催して頂き、誠にありがとうございます。御多忙の中、教職員の皆様をはじめ、多くの方々にご臨席を賜り、卒業生一同心より御礼申し上げます。

卒業を迎えるとなると、この学校で過ごした三年間の色々な出来事が頭によみがえってきます。

満開の桜のもと、それぞれ不安と期待を胸に抱えた入学式。しかし、入学した時から「コロナ禍」という世界だった事により、皆の笑った顔、怒った顔、眠そうな顔など、様々な顔を知るのに、どれほどの月日がかかったことでしょう。

入学して間もない頃、緊急事態宣言が出され、一時休校となりました。やっと少し学校生活に慣れたと思いきや、また家で過ごすようになって、休校明けは、友達との距離が少し空いてしまっていました。恐らく、例年と比べて皆がクラスに馴染むまでの時間が長かったでしょう。



スマホの中にある写真は、ほとんどがマスク姿で、唯一マスクを外すことができる昼食の時間でも、友達と話すことは許されませんでした。黒板に大きく書かれた「黙食」という文字が当たり前のようであった日々。シーンと静まり返る昼食の時間、最初は全然楽しくありませんでした。部活動でも、制限がかかる中で、必死に仲間と共に練習していても、その成果を見せたい相手も、場所さえもなくなっていく日々。時には、目標を見失ってしまうこともありました。



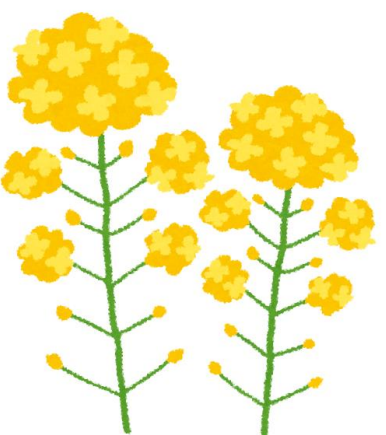
それだけではありません。初めての体育祭は、時間が短縮され、二年生の文化祭期間での楽しい時間も、準備を始めた次の日には、「中止」という言葉を告げられました。込み上げる涙を一生懸命こらえたことをよく覚えていますが、でも、全国どの高校生も同じように感じているのだからしょうがないと思っていました。本当は「つらいんだ」と声を大にして言いたかったけれど、言えませ

んでした。なぜなら、周りから「こういうご時世だから」という言葉で流されることがもつとつらくて、怖かったからです。

しかし、私達はずっとそうやって「怖い」で終わらせていたわけではありません。「こういうご時世だから」を「だからこそ」に変えて、少しずつ自分たちの意見を言えるようになりました。今年の体育祭では、応援リーダーを中心に全校の皆と協力して、行わない予定だった三年生の競技をやり遂げました。高校生活初めての文化祭では、新しい企画や仕組みを皆で考え、例年とは違う形で自分たちの色を創っていきました。

私たちは、決して可哀そうなんかじゃありません。このように、三年間で積み上げてきた経験と思いは、入学した当時からコロナ禍という混乱の中で過ごしてきた私たちにしかわからないからこそ、特別で、宝物になったと思います。この世界に「真正面からぶつかっていつて、乗り越えていく」これは、この学年で、このメンバーだったからこそ、乗り越えることができたのではないかと私は思います。そんな皆に出会えて、本当に嬉しかったです。

しかし、この三年間、自分たちの力だけでは、多くの事を学び、乗り越えることは決してできなかつたと思います。進路に迷っている私たち一人一人に向き合い、時には仕事の時間を割いてまで、私たちと一緒にパソコンを二つ並べて、大学調べを一緒に行つて下さった先生もいらつしゃれば、夜遅くまで学校に残つて調査書を書いて下さった先生、面接や小論文などに関して、私たちのために厳しくご指導して下さいましたからこそ私達は思います。



そして、今日、私たちはこの学校を卒業します。これから先、十年後、二十年後の世界がどうなっているのか、全くわからないけれど、多くの試練と苦難を乗り越えてきた私たちなら、先生方から教わった多くの教訓を胸に、一步一步前に進んでいけると強く思います。

最後になりますが、校長先生をはじめ、未熟な私たちをご指導くださいました先生方、そして十八年間、私たちのわがままを一つ一つ受け止めて下さった保護者の皆様、改めて御礼申し上げますとともに、卒業生を代表し、唐津西高等学校の輝かしい発展を祈念いたしました。誠に有難うございました。

令和五年三月一日

卒業生代表 山崎 良美

